



◀聖ヨセフ聖堂内部  
ムーア様式とされるらせん形の柱が特徴。近年の大改修で往時の美しさを取りもどした。フランシスコ・ザビエルの遺骨の一部が安置されている

▶聖ヨセフ聖堂  
イエズス会により1758年に建設。やはり同会により建設された聖ポール天主堂跡(中国語で大三巴)のデザインに似ることから、通称は「三巴仔(小さな大三巴)」



### マカオを造ったキリスト教

マカオには大堂区、花王堂区、風順堂区といった区分けがある。「堂」は教会。つまり、地区ごとにある教会をへそとした教区で街を分けているわけで、マカオの街の成り立ちが教会に深く関係していることがわかる。ちなみに、大堂は大聖堂(カテドラル)、花王堂は聖アントニオ教会、風順堂は聖ローレンス教会。いずれも世界遺産の一部だ。

16世紀、ポルトガル人のジョルジェ・アルバレスが開拓した南シナ海航路で珠江デルタにやってくるポルトガル人、スペイン人などが増加。その後マカオの実権を握ることになるポルトガル人がマカオへの本格的な移民を開始したのは1550年代といわれる。これにともない、キリスト教各派も各国王室の経済的援助を後ろ盾にマカオに進出する。最も早く創建されたのがポルトガル系のイエズス会による聖アントニオ教会(1558~1560年建築)と聖ローレンス教会(1560年以前)。前者は焼失により1930年に改築、後者も現在の姿になった



# マカオ

笠原宗彦 文  
東昇 写真

## 世界遺産ガイド [1]

マカオ開拓の礎となったキリスト教。さまざまな教会建築を見て歩けばこの街の歴史が垣間見える

今年7月の第29回国連教育科学文化機構(ユネスコ)世界遺産委員会で、マカオの歴史的市街地区の世界遺産登録が決まった。マカオは1999年に中国に返還されていることから、世界遺産締約国である中国が持つ1件の申請枠によって申請し、登録を認められた。マカオ特別行政区政府が中国中央政府と連携しながら、足掛け4年にわたって準備してきた申請作業が実を結んだ。世界遺産として認められたのは「ヒストリック・センター・オブ・マカオ」と名付けられたマカオ半島の市街地区。このエリア内に20を超える歴史的建築物や広場がある。ポルトガル統治時代を回想させる教会を始めとした西洋建築、広場、砲台跡などがある一方で、中国式の廟、邸宅なども。それはそのまま、400年以上の長きにわたって、東西の文化が共存してきたマカオの歴史を象徴するものだ。今回から2回に分けて、マカオ世界遺産を紹介する。1回目は、マカオ開拓の支柱となったといっても過言ではないキリスト教布教活動の拠点、教会建築を見ていく。



大聖堂

マカオを代表する聖堂だけあり、シンメトリックの威厳あふれる建築。創建ははっきりしないが、1622年にレンガ造りの聖堂が完成したという。現在の建物は1937年に改築されたもの



聖ポール天主堂跡

イエズス会が17世紀初頭に35年の歳月をかけて完成したものの、大火災で正面以外は焼失。壁には聖人像が据えられているほか、日本の菊や聖書からの引用文も刻まれている



聖ローレンス教会

ヨーロッパ古典主義にバロック様式を合わせたシンメトリックの建築は1846年までに完成したといわれる。聖ローレンスは海の神で、その昔は船員の家族が祈禱に通った



聖ドミニコ教会

出入り口や窓の上に施された浮き彫りの美しさが目を引く。鐘楼は博物館として公開され、カトリック関連の展示物300点以上が展示されている。17世紀の建築

教会進出の歴史を見ても、列強の両巨頭だったポルトガルとスペインのつばぜりあい草創期マカオでも繰り広げられたであろうことが想像できる。カトリックの長であるパチカンの目を気にしながら、表立つての対立は避けながらもならみ合い、好むと好まざるにかかわらず共存せざるをえない状況もあったようだ。

毎年2月から3月に催されるパソソの聖体行列は、聖オーガスティン教会から運び出されたキリスト像の行列が夜中に街を行進し、セナド広場近くの大聖堂に運び込まれた後、翌朝再び

### ライバルの静かな対立

聖ヨセフ修道院だ。現在もマカオ唯一の修道院として運営が続く。公開されている聖堂は1758年の建築。バロック建築にムーア式の要素を取り入れたユニークなデザインで、とくに内部の美しさはマカオの教会でも随一。小ぶりながらも正面のデザインが聖ポール天主堂跡に似ていることから地元では「三巴仔」の別名も。フランススコ・ザビエルの腕の骨の一部が安置されていることで知られる。

オーガスティン教会へ戻ると「奇怪祭」。これが実は、かつてのポルトガル対スペインの静かな対立に由来する行事なのだ。

### アジア布教の基地として

ポルトガルは16世紀半ばにはマカオのイニシアチブを掌握。17世紀初めに建てられた大聖堂には、代々ポルトガル人の大司教が派遣された。そして、はつきりした記録はないが、ある日、マカオ政府はスペイン系のオーガスティン教会にあつたキリスト像を半強制的に大聖堂へと移したという。ところが、その翌日、キリスト像はなぜかオーガスティン教会へ戻っていた。再び戻すも、またもや……と、聖像の奪い合いが続いたのであった。

ほかの教会が建て直しなどを経ながら

の1846年のことだ。アントニオ教会はかつてポルトガル人が結婚式を挙げるが多かったことから「花王堂」、そしてローレンス教会はポルトガル人船員の家族が夫の順風満帆を祈ったことから「風順堂」と、それぞれ中国語名が付いた。

ポルトガル系教派に水をあけられてはならずとばかりに、当時列強としてポルトガルと世界を分け合ったスペインの教派もマカオ上陸を始める。セナド広場奥にある聖ドミニコ教会は1587年創建。スペイン系のドミニコ修道会の修道士3人が板張りの質素な教会を建てたのが始まりで、現在の壮麗なバロック建築は17世紀に完成したものだ。

やはりスペイン系のオーガスティン修道会によつて創建されたのが聖オーガスティン教会。創建は1591年というが、現在の重厚な建物は19世紀初頭の建築。当初は粗末な建物で嵐が来たときには、ヤシの葉で屋根を覆わなければならぬほどだったという。

現在まで続いているのに対し、マカオのシンボルである聖ポール天主堂跡は少々特異な存在といえる。同天主堂はイエズス会が1602年から35年もの月日をかけて完成させたもの。建築には日本のキリシタン弾圧政策から逃れてきた日本人教徒もたずさわった。1637年にマカオを訪れ、天主堂を見た英国商人のピーター・マクドナルドは手記に「天主堂建設のため）彼らは自らの財産も命もいとわなかったのだ」と記し、その偉業を讃えている。ところが、1835年に大火災が発生。建物正面だけを残してあとは焼け落ちてしまった。

それでも、その威容はほかの教会を寄せ付けないものがあり、マカオを代表する建築物としてふさわしい。地元マカオの中国人は、ポルトガル語の発音にちなみ、親しみをこめて「大三巴」と通称する。

聖ポール寺院には中国初の西洋式大学、聖ポール学院が併設され、学院が閉鎖される1706年まで多数の修道士を育ててアジア各地へと布教に送り出した。この聖ポール学院の跡を継いで、イエズス会修道士の養成機関となったのが、1728年に創立された